「本邦附近の地殼內部に於ける起震歪力に就て」訂正

本多弘吉，正務一章

驗震時報第 11 卷第 2 號 183〜216 に上に掲げた表題のもとに，多くの地震の發震機構を研究して，本邦附近地殼內部の起震歪力の分布狀態を調べた．そのうち（4・a）に於て深發地震帶及び稍深發地震帶に夫々大體直角になつてゐるやうな幾つかの鉛直面を考へ，之等の面の附近に起つた地震の主壓力及び主張力の方向等を第 12 圖に示した．所がよく考へて見ると同圖の表し方には不充分な所があり，若干の誤りをも含んでゐることに氣附いたので，第 12 圖及び本文 214 頁の第 3 行目「深發地震に於ても……」から第 9 行目迄一應取消しを願ひ，此の部分に就ての同樣な調査を新しく行つた結果を次に簡單に報告する．この爲に本文の結論に何等の影響を及ぼすことのないのは勿論である．

A 圖に aa′b′b, cc′d′d, ee′f′f, gg′h′h, ii′j′j として示した細長い短形の地域を考へる．a—b は N 50°W—S 50°E に向き宗谷深發地震帶に略々直角であり，c—d, e—f, g—h, i—j は夫々 S 70°W—N 70°E に向き横斷深發地震帶に略々直角に向いてゐる．夫々の短形の地域內に起つた地震の震源位置を a—b, c—d, e—f……の鉛直面に投影する．但し淺發地震は數も非常に多く，震源の深さも詳細には判り難いものが多いので此處には唯淺發地震の多い區域を模式的に示すに止める．次に之等の地域內に起つた深發地震及び稍深發地震のうち發震機構の判明したものゝ主壓力の方向を夫々の面に投影して B 圖に實線の矢印で示すと之等は相互に殆ど同じ方向に向いてゐるものが多い．第 7 圖を參照して全體的に見て之等地震を惹き起したと考へられる剪斷歪力の概略の方向を同圖に點線の矢印で示す．

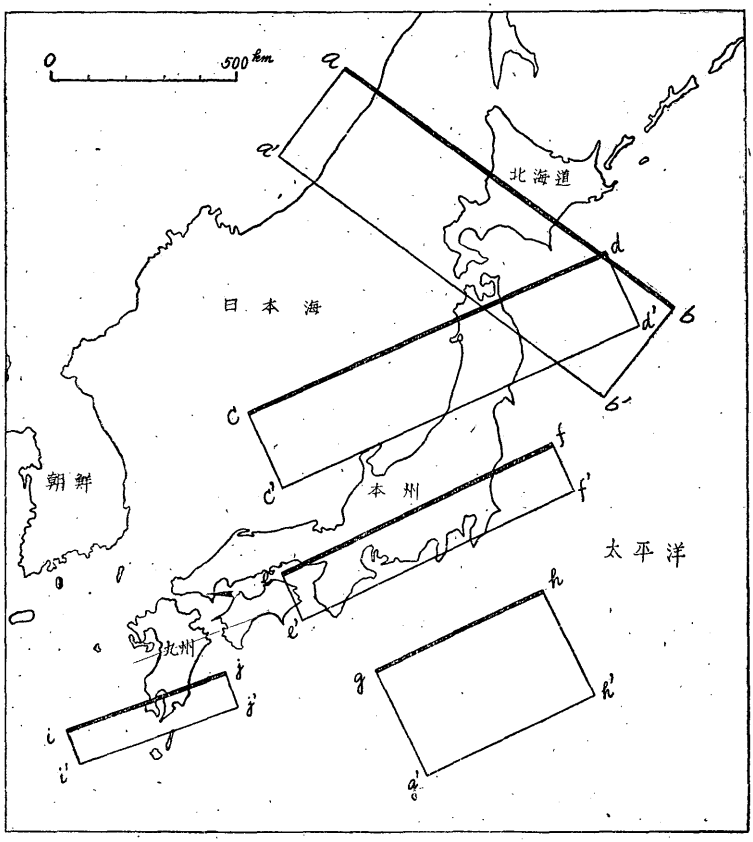
之等の結果を綜合すると，浦鹽附近を頂點として此の邊で直角に交はる宗谷

深發地震帶と横斷深發地震帶とによつて圍まれた地域の外緣部の地下 300 粁乃至 500 粁程度の深處から，その內部の東北地方太平洋岸の淺發地震頻發地域に向つて水平と 30° 乃至 45° の傾きをなしてゐる面の附近に多くの地震が起つてゐる．而して此の面を境としてその外側上方の部分は上方に押上げられ，內側下方の部分は押下げられやうとするやうな傾向の剪斷歪力が働いてゐるとも考へることが出來る．

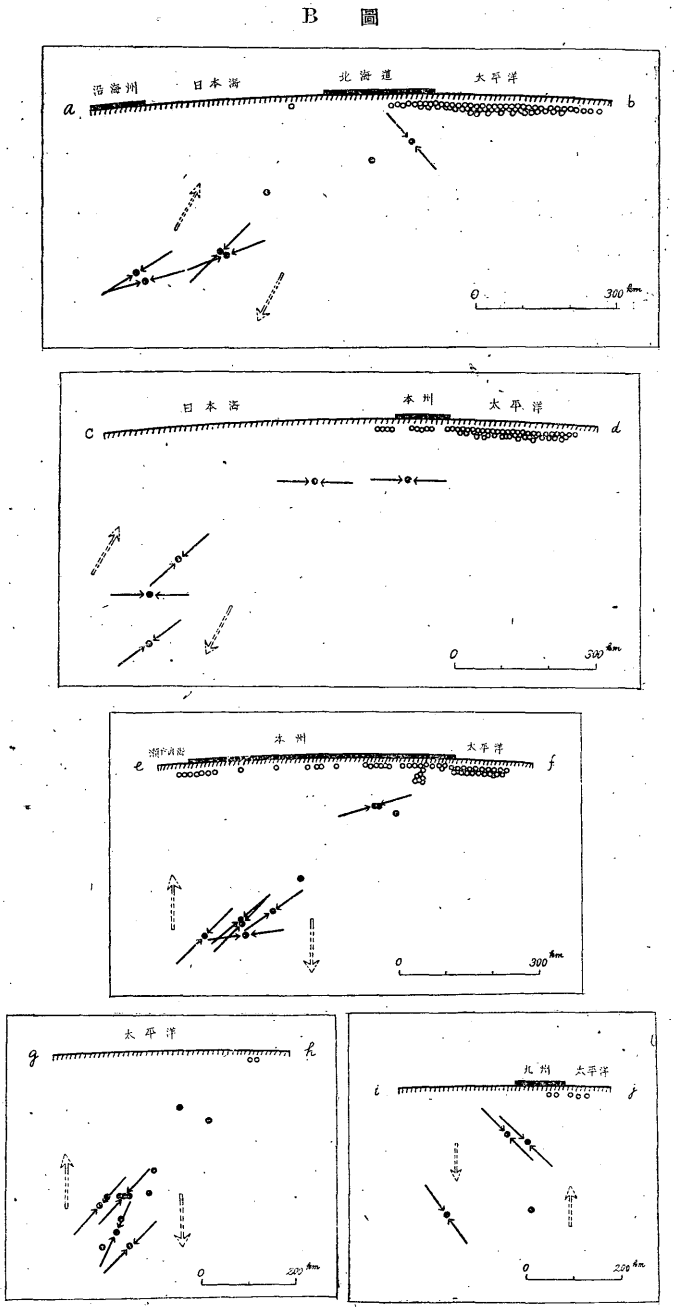
九州南部に就ては B 圖 v に示すやうに推定剪斷歪力の向きが本邦の他の地方のとは丁度逆に向いてゐるやうである．

（昭和 16 年 5 月　中央氣象臺に於て）

A　　圖



B 圖


沿海州
日本海
北海道
太平洋
a
b
0
300 km
日本海
本州
太平洋
c
d
0
300 km
沿海州
本州
太平洋
e
f
0
300 km
太平洋
g
h
0
200 km
九州
太平洋
i
j
0
200 km